

十勝岳の火山活動解説資料（令和7年9月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

62-2火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では引き続き噴煙・噴気が多く、熱活動が活発な状態が続いています。今後の火山活動の推移には注意が必要です。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上600m以下で経過しました。大正火口の噴煙の高さは100m以下、振子沢噴気孔群の噴煙の高さは稜線上300m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴煙は2018年頃からやや高い状態が続いています。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-④～⑥、図4～8）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は62-2火口のごく浅い所、旧噴火口付近のごく浅い所～深さ1km付近、グラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近及び西側山腹の深さ0km～深さ2km付近に分布しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図5、図7、図9～10）

8日および20日に62-2火口付近のごく浅い所で発生した火山性地震と同期して、主に62-2火口の周辺の傾斜計でわずかな傾斜変動を観測しました。2018年以降、62-2火口付近の地震や火山性微動と同期した傾斜変動が時折観測されています。

GNSS連続観測では、2021年以降に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は一部の基線で概ね停滞しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイトル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和7年10月分）は令和7年11月11日に発表する予定です。

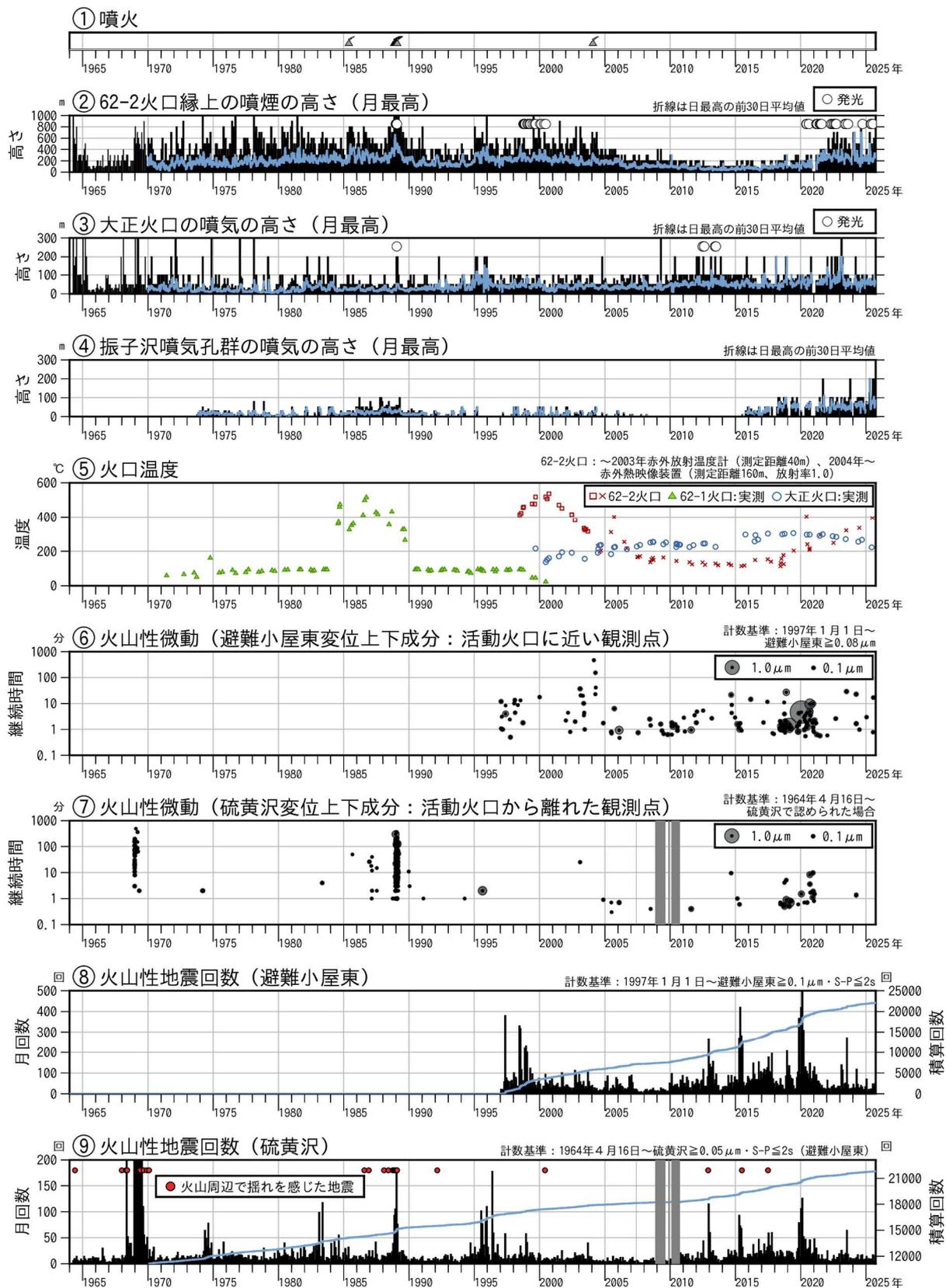


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2025年9月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

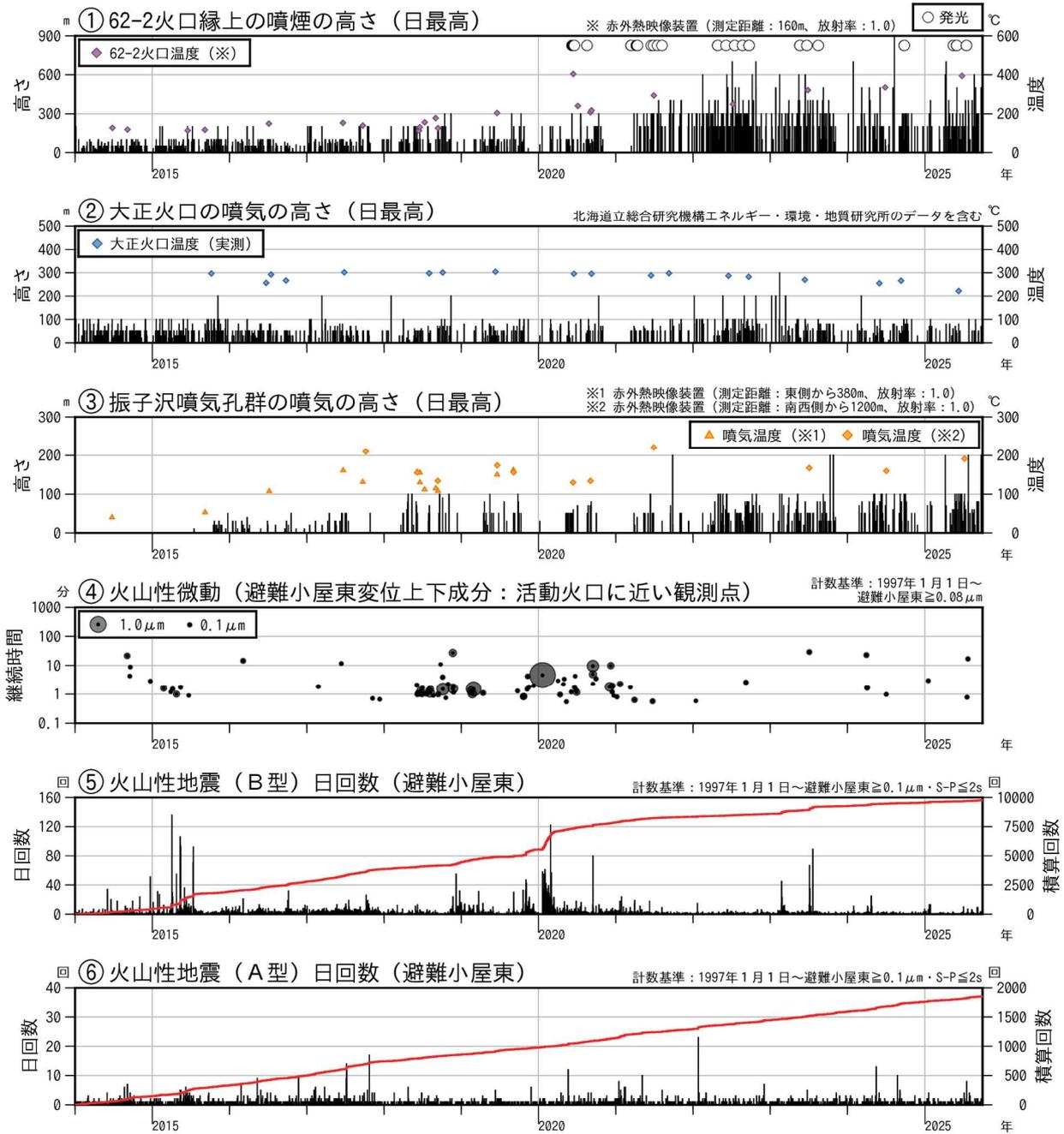


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2025年9月）

⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図8参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

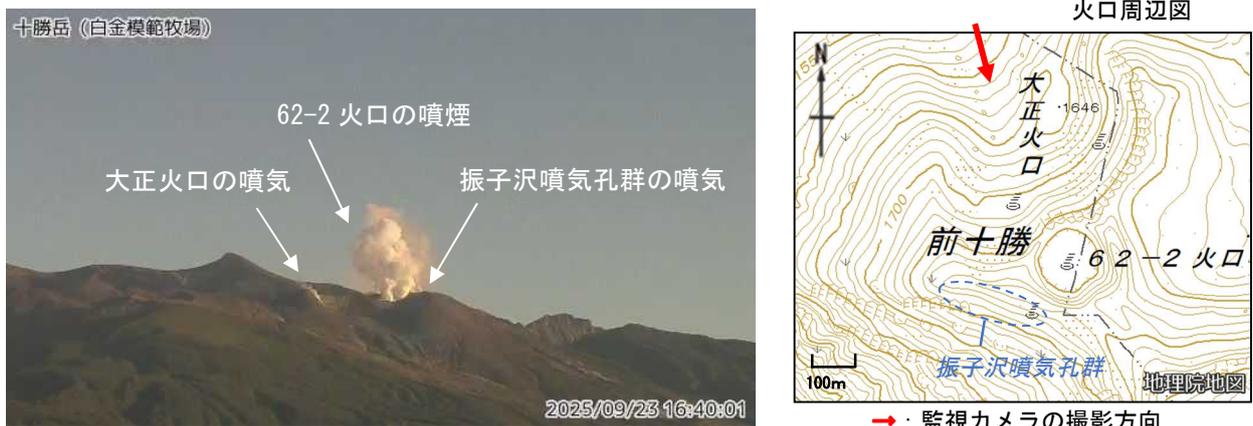


図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

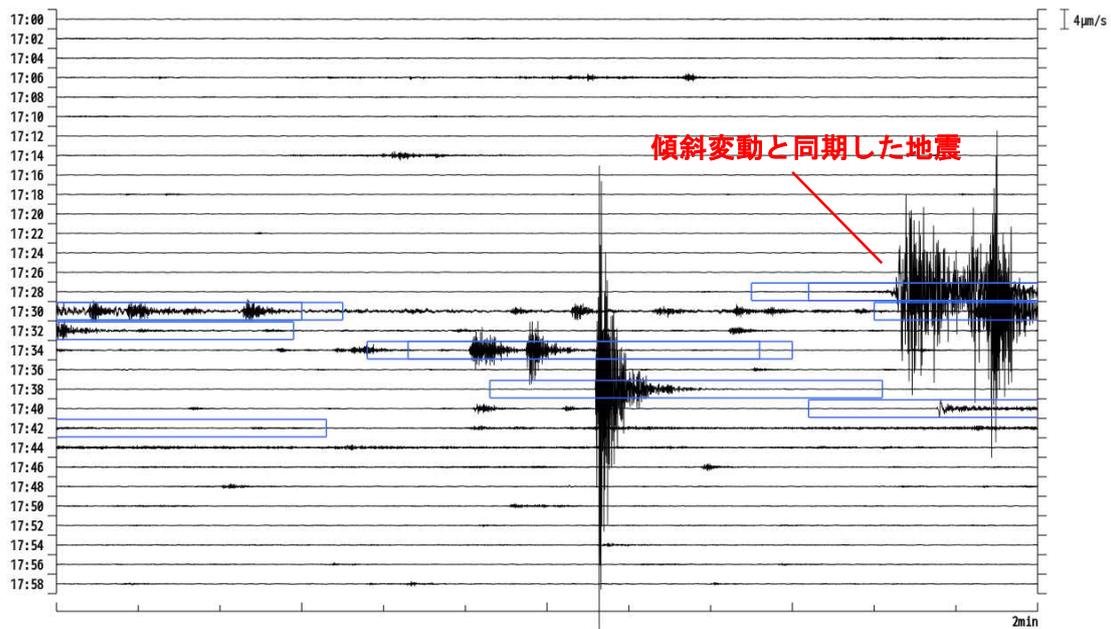


図4 十勝岳 避難小屋東の速度波形上下成分（8日17時～18時）

図中の青枠は火山性地震を示します。

- ・ 8日17時29分頃に62-2火口付近のごく浅いところでわずかな傾斜変動を伴う火山性地震が発生しました。発生後、火山性地震がごくわずかに増加しています。

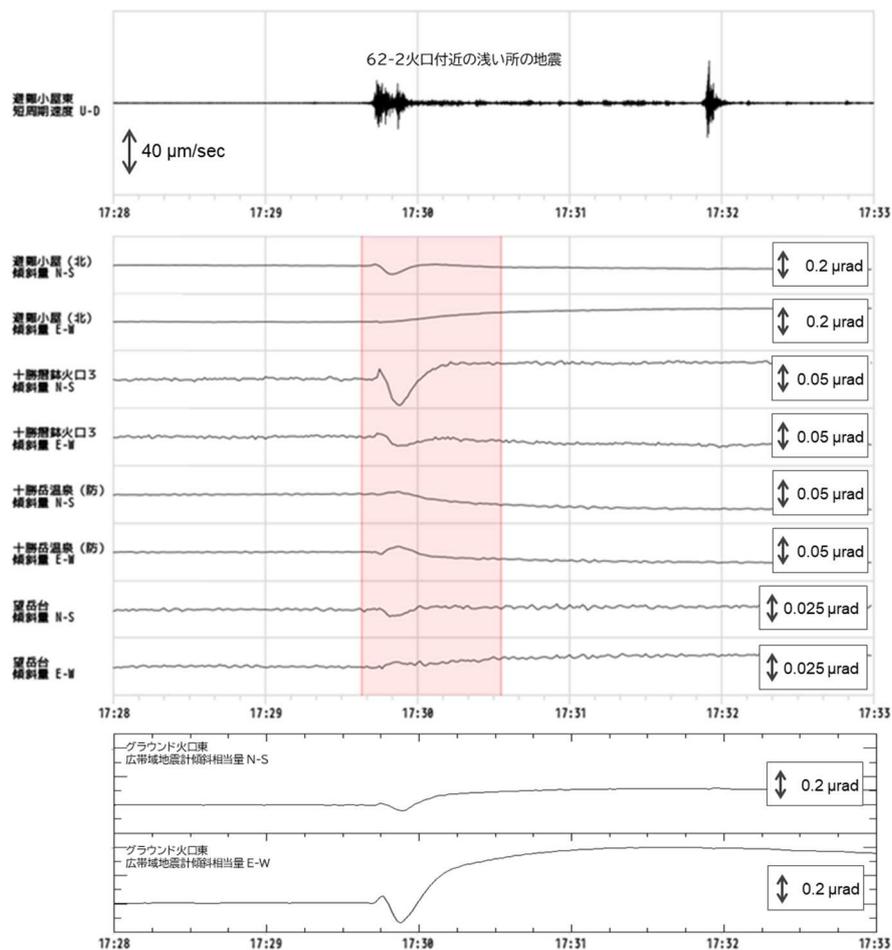


図5 十勝岳 火山性地震と同期して発生した傾斜変動（8日17時28分～17時33分）

傾斜変動の南北成分（N-S）は上が北上がり、東西成分（E-W）は上が東上がりを示します。傾斜変動は並進成分を含みます。

- ・ 8日17時29分頃に発生した火山性地震と同期して、主に62-2火口周辺の傾斜計でわずかな傾斜変動を観測しました。

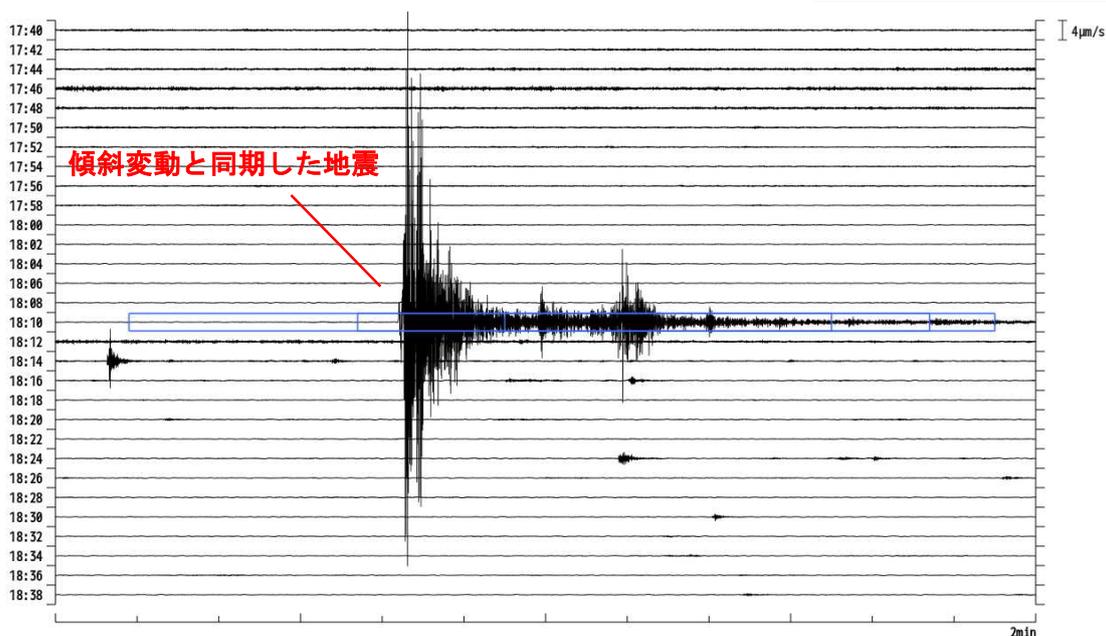


図6 十勝岳 避難小屋東の速度波形上下成分 (20日17時40分～18時40分)

図中の青枠は火山性地震を示します。

- ・20日18時10分頃に62-2火口付近のごく浅いところでわずかな傾斜変動を伴う火山性地震が発生しました。発生前後、火山性地震の発生状況等に特段の変化は認められませんでした。

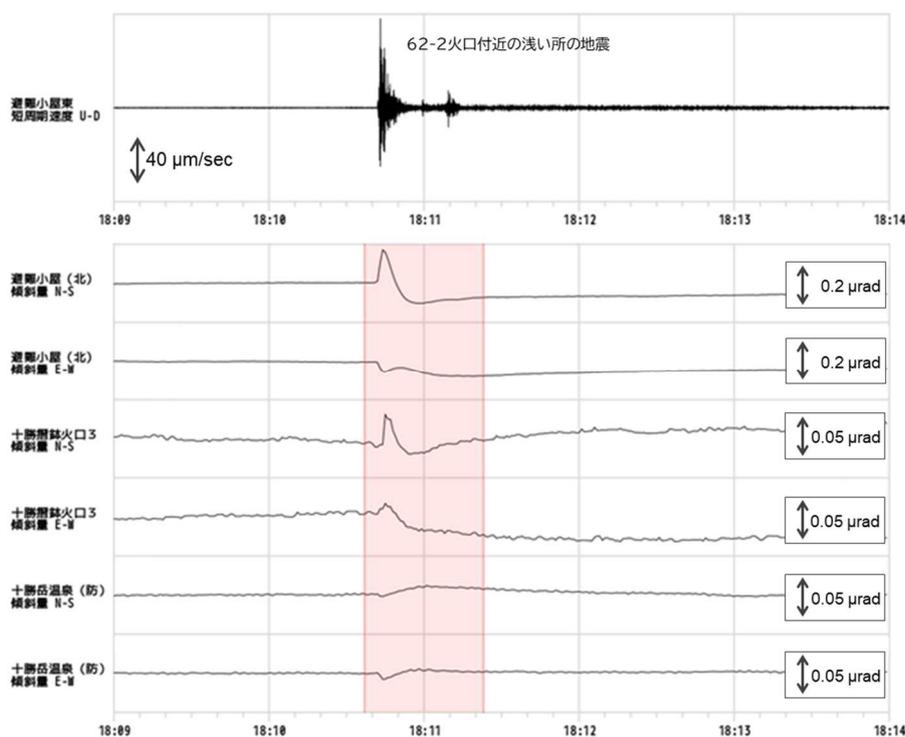


図7 十勝岳 火山性地震と同期して発生した傾斜変動 (20日18時09分～18時14分)

傾斜変動の南北成分 (N-S) は上が北上がり、東西成分 (E-W) は上が東上がりを示します。

傾斜変動は並進成分を含みます。

- ・20日18時10分頃に発生した火山性地震と同期して、主に62-2火口周辺の傾斜計でわずかな傾斜変動を観測しました。

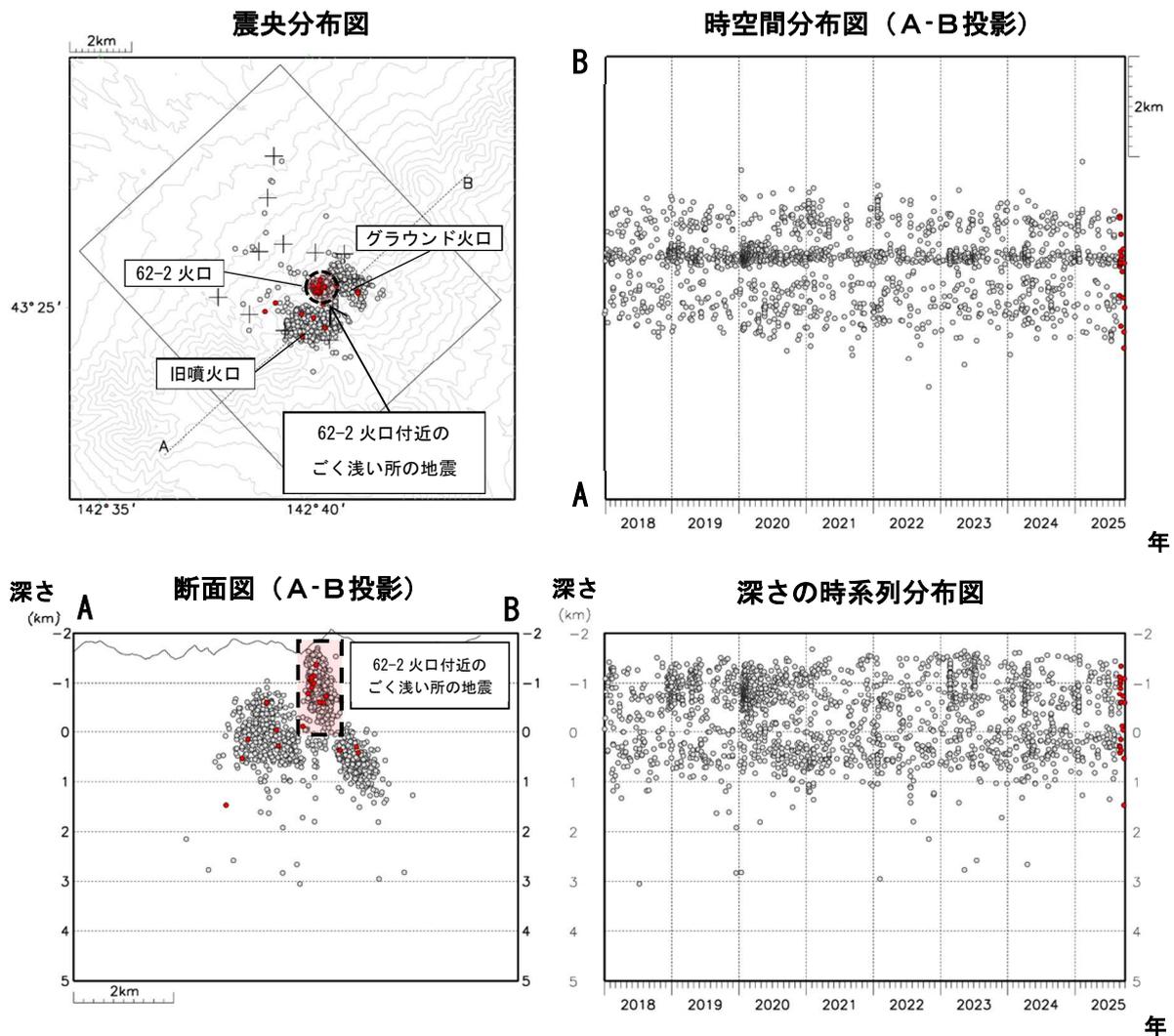


図8 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2025年9月）

●：2018年1月～2025年8月の震源 ●：2025年9月の震源 +：地震観測点

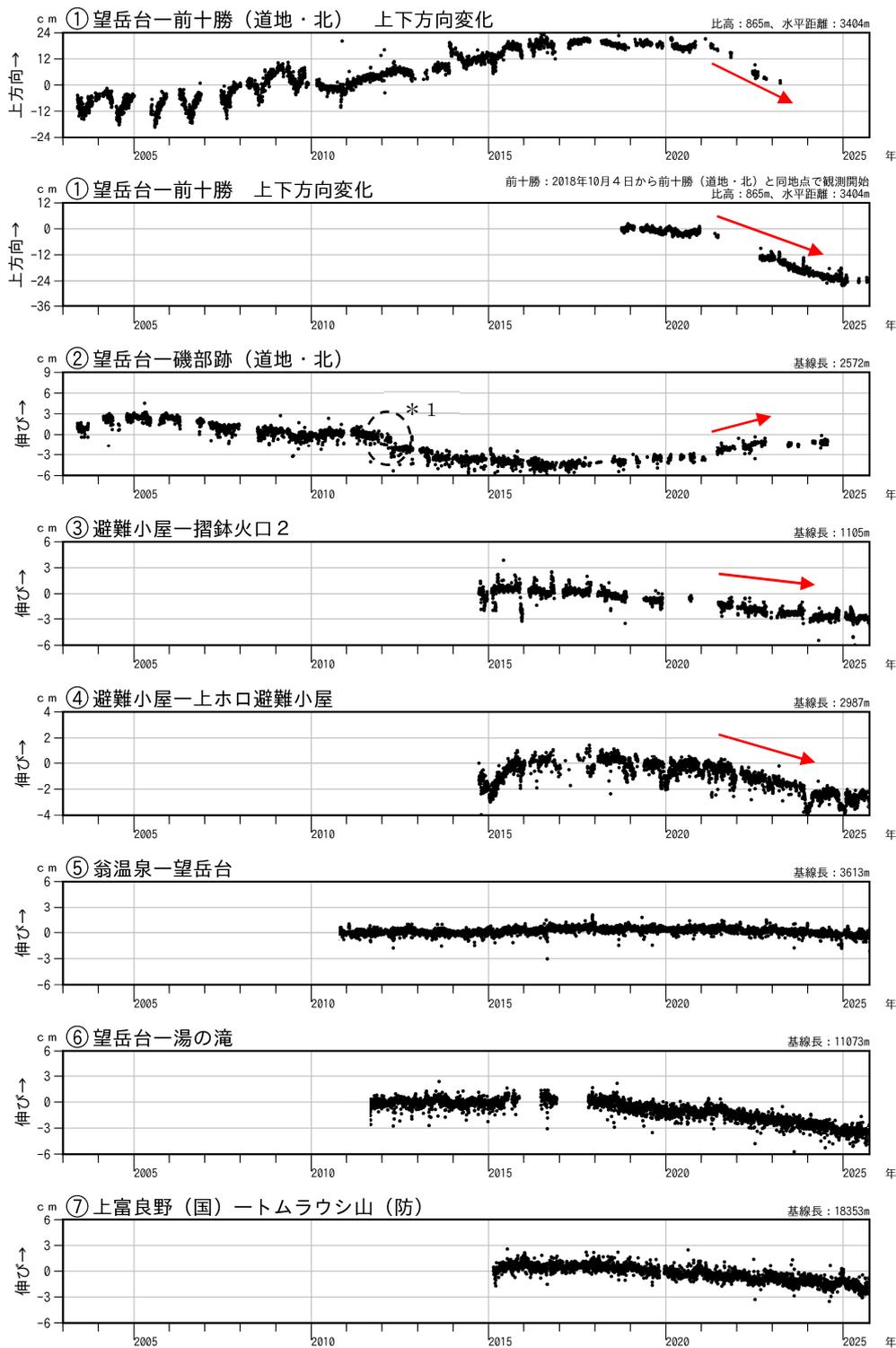


図9 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2025年9月）

グラフ①～⑦は観測点配置図（図10）の基線①～⑦に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（赤矢印）が観測されていますが、2022年頃からやや鈍化しています。62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線③④は、2024年秋以降、概ね停滞しています。
- ・ 基線⑥⑦では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いています。

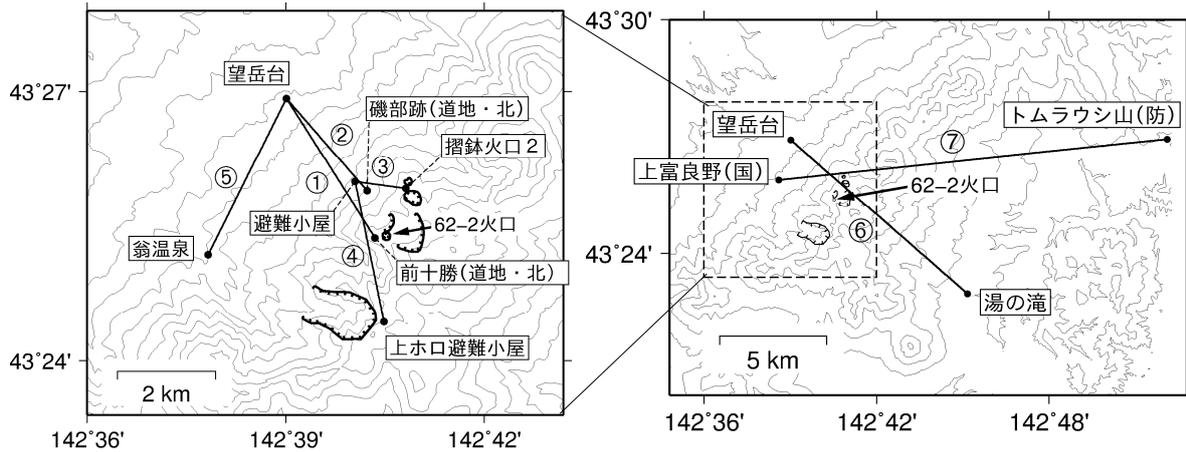


図10 十勝岳 GNSSS連続観測 観測点配置図
 図中の基線①～⑦は図9のグラフ①～⑦に対応しています。

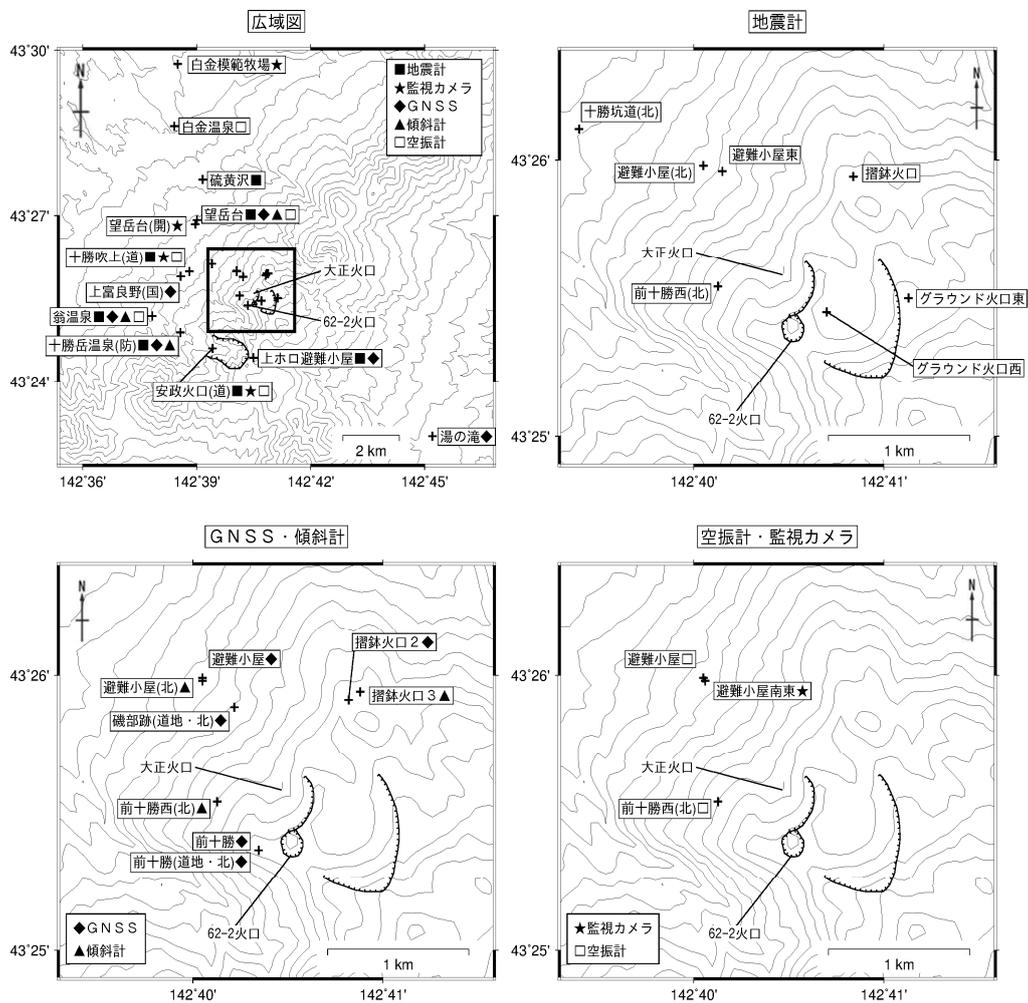


図11 十勝岳 観測点配置図
 各機器の配置図は、広域図内の太枠線で示した領域を拡大したものです。
 +印は観測点の位置を示します。
 気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。
 (開) : 国土交通省北海道開発局
 (国) : 国土地理院
 (北) : 北海道大学
 (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
 (道) : 北海道
 (道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所